制作ノート

路上の詩シリーズⅠ

野　村　正　則

Poems of the Street（Ⅰ）

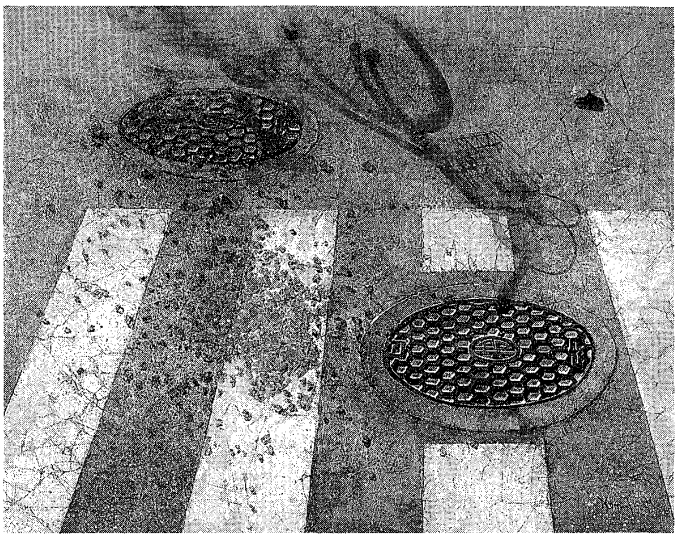
Masanori NOMURA

「路上の詩シリーズ」は，1995（平成７）年４月・第72回春陽展に出品した「路上の詩・ガラス」以来私の作品のテーマとなっている。

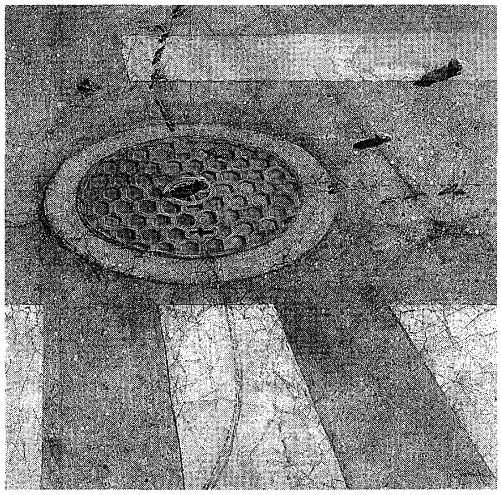
日常生活の中で，目に触れるごく当たり前の光景も，色彩を光に還元して眺めるとなんと様々な階調があるのだろうと感じる。

「路上の詩シリーズ」では，生命の象徴としての蟻やテントウ虫，それに相対する蛾やセミ・セミの抜け殻，中性的な小石やガラス破片の輝きと陰影など，光と影のつくりだす明暗の階調。横断歩道の直線・マンホールやガス栓の楕円形等がつくりだす幾何形態の構成……。これらの造形の追求に，現代社会の生み出す様々な危うい光と影をオーバーラップさせた表現を試みている。

「路上の詩シリーズ」をテーマにして10年を経過したのを機に，自作を振り返りたいと思い，今回は2000年１月までの作品を発表順に整理掲載した。

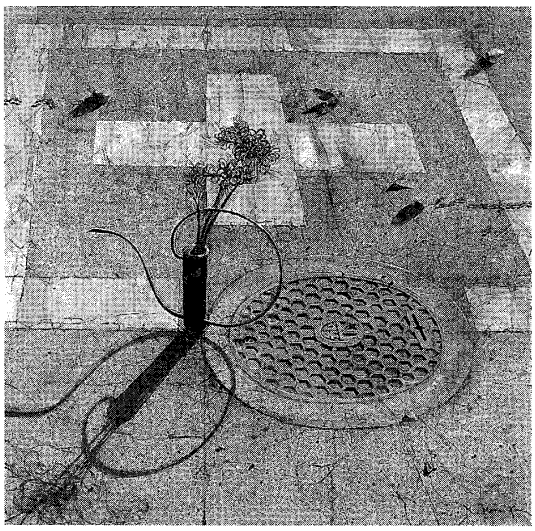


1，「路上の詩・ガラス」
パネル画布張り・アクリル顔料・ガラス・
F100号（162×130.3cm）
第72回　春陽展＊1
東京都美術館・1995年4月



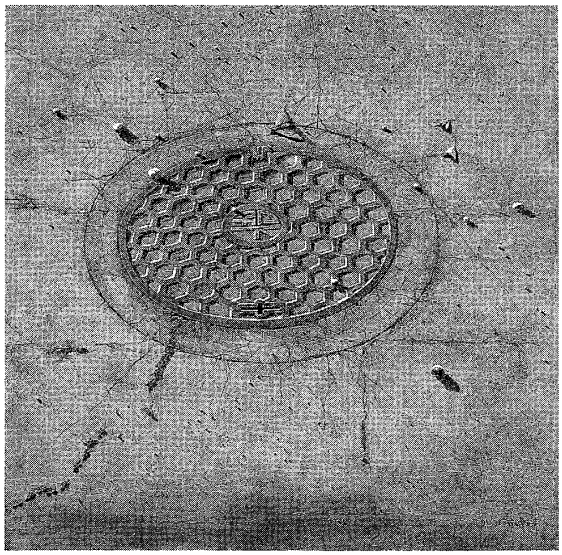
2，「路上の詩・蟻」
パネル画布張り・アクリル顔料
S60号（130×130cm）
第31回　大分県美術展＊2〈美術協会賞受賞〉
大分県立芸術会館・1995年7月

3，「路上の詩・蛾」
パネル画布張り・アクリル顔料・ガラス
S100号（162×162cm）
第3回　別府現代絵画展＊3〈優秀賞受賞〉
別府市美術館・1996年1月



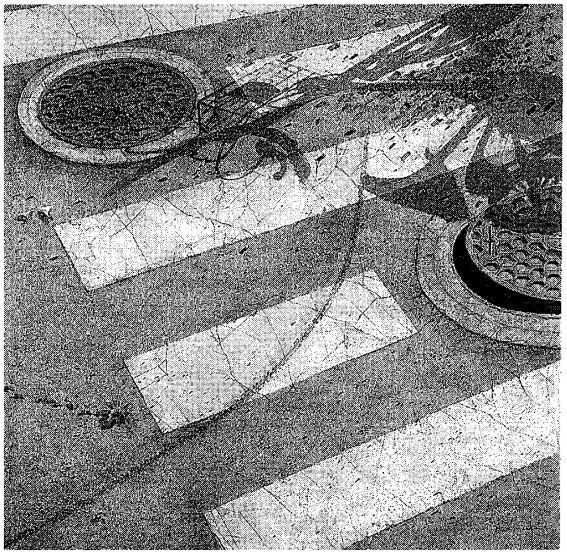
4，「路上の詩・彼岸花」
パネル画布張り・アクリル顔料
S60号（130×130cm）
第5回　青木繁記念大賞公募展＊4
久留米市・石橋財団石橋美術館・1996年2月
郡山市立美術館・1996年6月

5，「路上の詩・ガス」
パネル画布張り・アクリル顔料・ガラス
S100号（162×162cm）
第73回　春陽展
東京都美術館・1996年4月

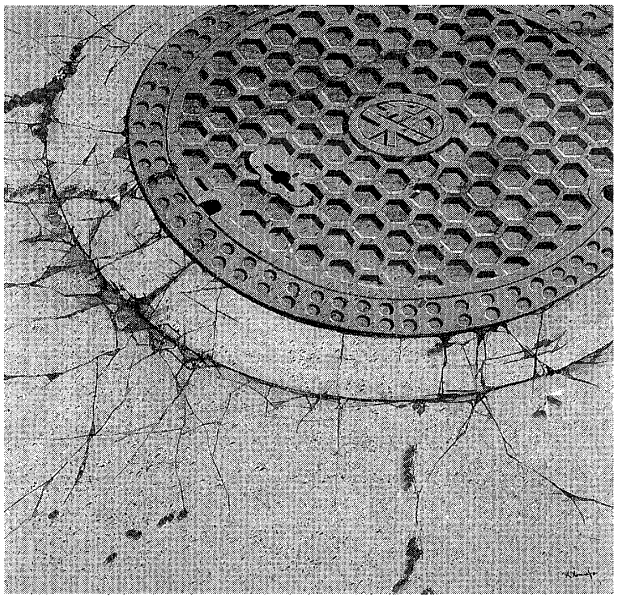


6，「路上の詩・マンホール」
パネル画布張り・アクリル顔料
S80号（145×145cm）
第29回　西日本美術展＊5
久留米市・石橋財団石橋美術館・1996年6月

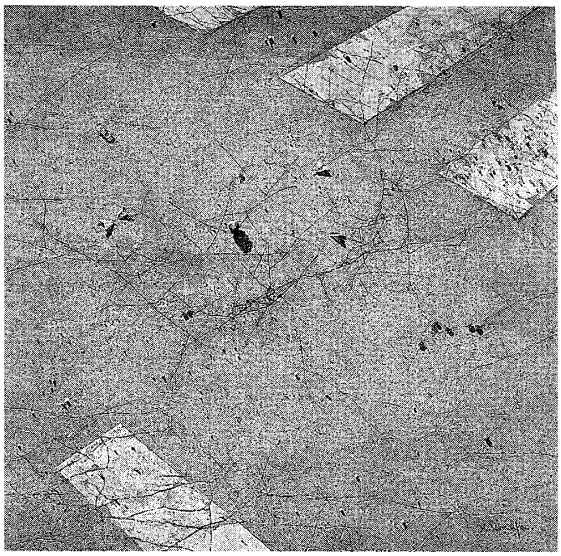
7，「路上の詩・自転車」
パネル画布張り・アクリル顔料
Ｓ100号（162×162㎝）
第32回　大分県美術展〈美術協会賞受賞〉
大分県立芸術会館・1996年10月



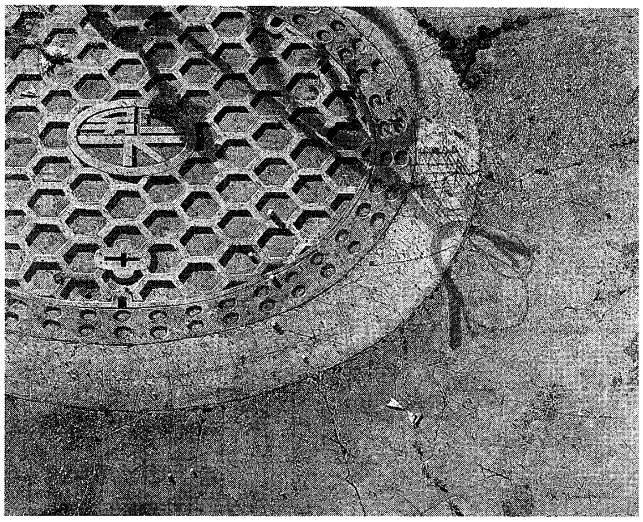
8，「路上の詩・轍」
パネル画布張り・アクリル顔料・ガラス
Ｓ80号（145×145㎝）
第３回　小磯良平大賞展＊６〈佳作〉
神戸市立小磯記念美術館・1996年12月
東京・大丸ミュージアム・1997年２月
福岡・天神博多大丸・1997年３月



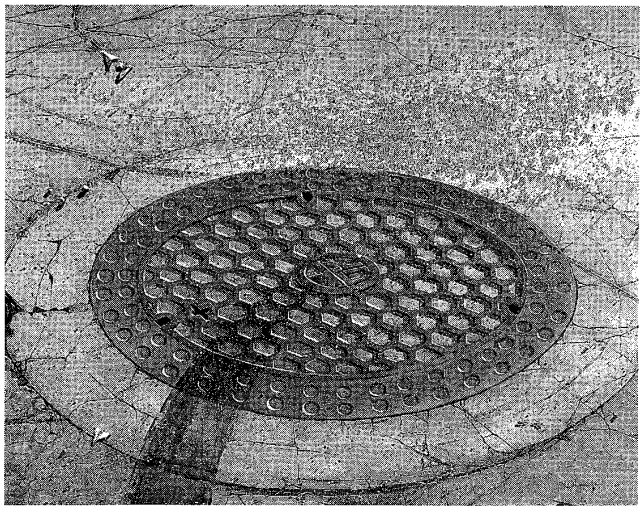
9，「路上の詩・カタバミ」
パネル画布張り・アクリル顔料
Ｓ100号（162×162㎝）
第４回　別府現代絵画展〈優秀賞受賞〉
別府市美術館・1997年１月



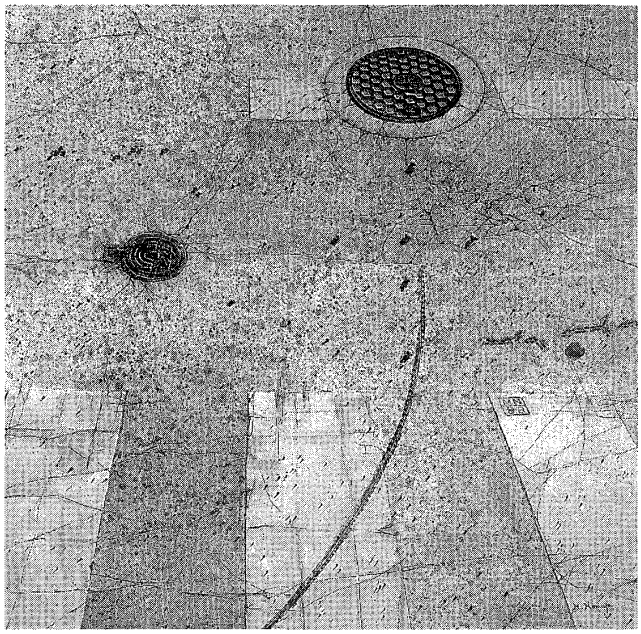
10,「路上の詩・リングプル」
パネル画布張り・アクリル顔料
Ｓ80号（145×145㎝）
第74回春陽展〈奨励賞受賞〉
東京都立美術館・1997年４月
愛知県立美術館・1997年５月
大阪市立美術館・1997年６月



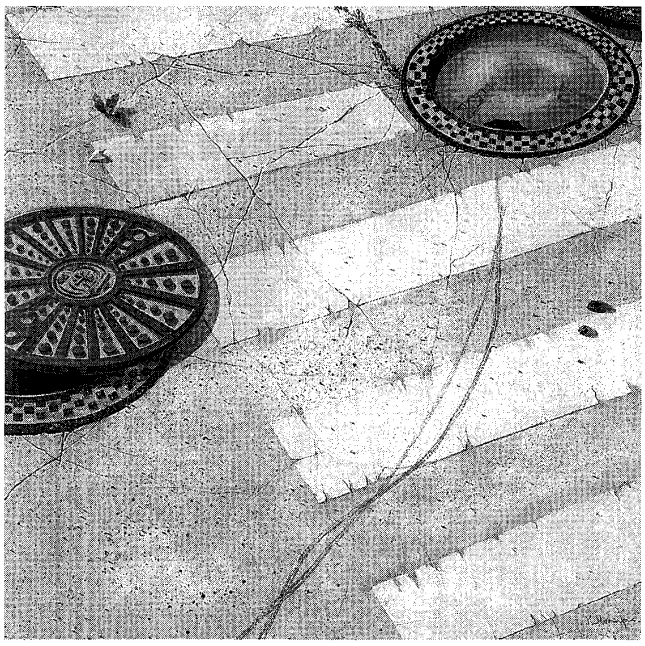
11,「路上の詩・ボタン」
パネル画布張り・アクリル顔料・ボタン
Ｆ100号（162×130㎝）
第５回　別府現代絵画展
別府市美術館・1998年１月



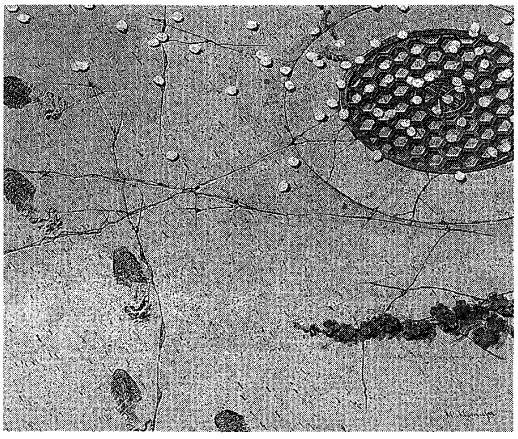
12,「路上の詩・飛散」
パネル画布張り・アクリル顔料・ガラス
Ｆ100号（162×130㎝）
第７回　青木繁記念大賞公募展
久留米市・石橋財団石橋美術館・1998年３月
郡山市立美術館・1998年５月



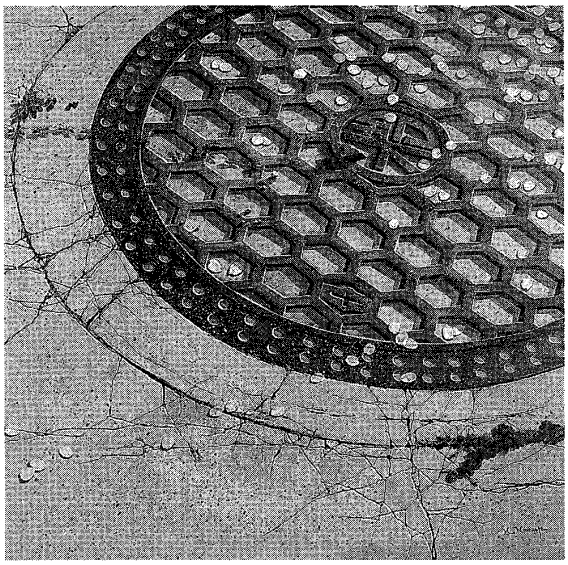
13,「路上の詩・リベット」
パネル画布張り・アクリル顔料
Ｓ100号（162×162cm）
第75回　春陽展
東京都美術館・1998年４月



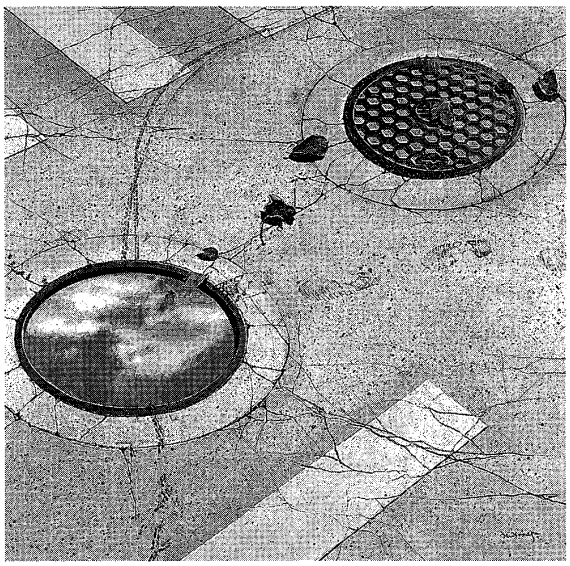
14,「路上の詩・空・田川」
パネル画布張り・アクリル顔料
Ｓ100号（162×162cm）
第７回　英展＊７〈大賞受賞・田川市美術館収蔵〉
田川市美術館・1998年６月



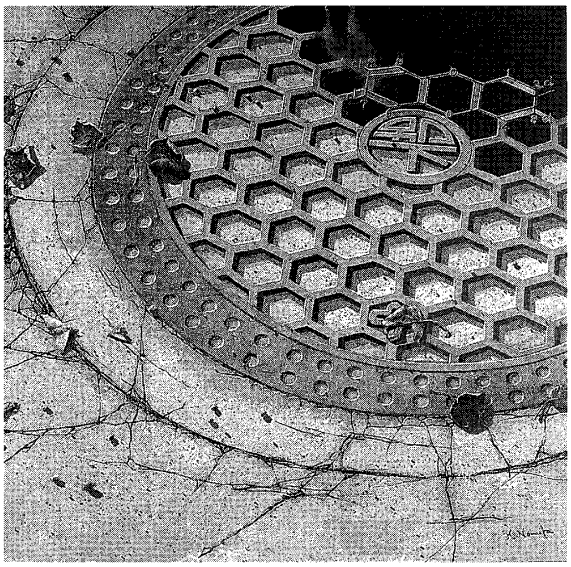
15,「路上の詩・春」
パネル画布張り・アクリル顔料
変形60号（130×115cm）
第32回　大分県美術展〈美術協会賞受賞〉
大分県立芸術会館・1998年９月



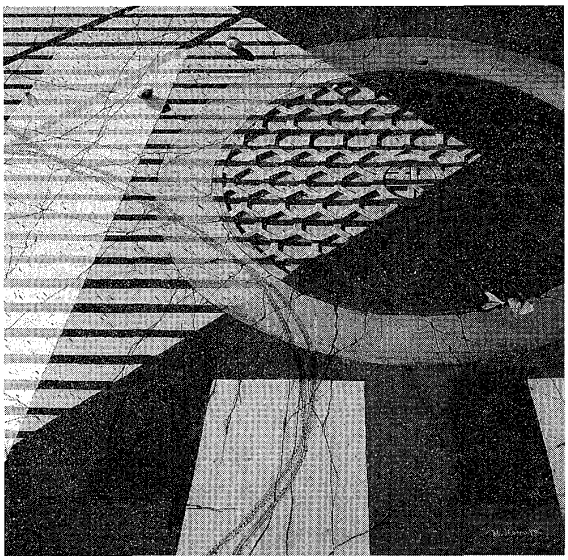
16,「路上の詩・さくら」
パネル画布張り・アクリル顔料
S100号（162×162cm）
第4回　小磯良平大賞展
神戸市立小磯記念美術館・1998年12月
北海道・帯広藤丸デパート・1999年4月
福岡・天神博多大丸・1999年4月
東京・大丸ミュージアム・1999年5月



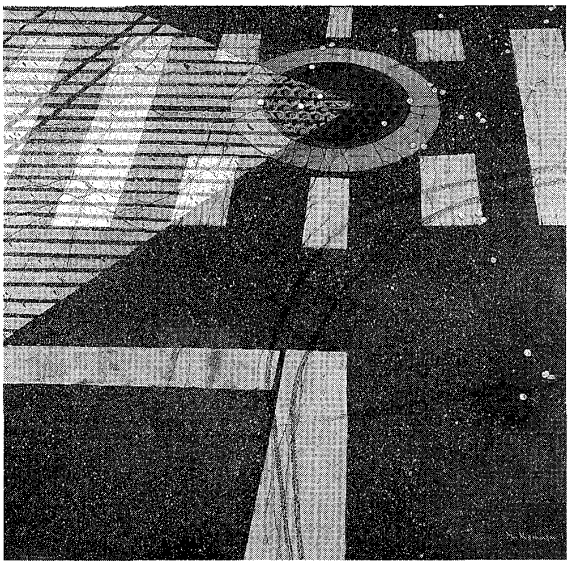
17,「路上の詩・空へ・・・」
パネル画布張り・アクリル顔料
S100号（162×162cm）
第6回　別府現代絵画展
別府市美術館・1999年1月



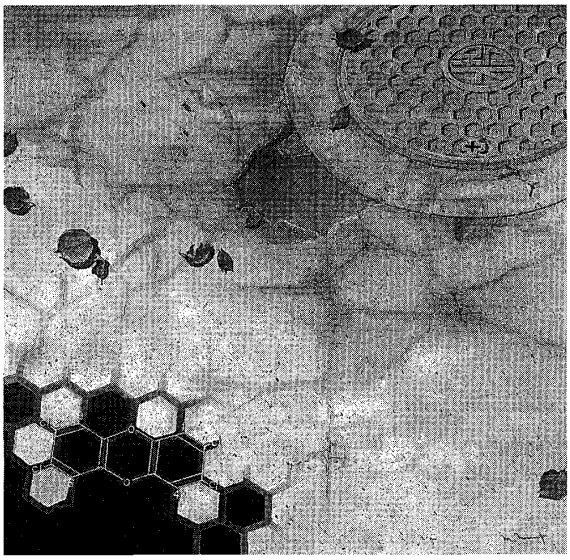
18,「路上の詩・Dioxine」
パネル画布張り・アクリル顔料
S100号（162×130cm）
第8回　青木繁記念大賞公募展〈優秀賞受賞〉
久留米市・石橋財団石橋美術館・1999年3月
郡山市立美術館・1999年5月



19,「路上の詩・ゼブラクロッシング近」
パネル画布張り・アクリル顔料
Ｓ100号（162×162cm）
第76回　春陽展〈奨励賞受賞〉
東京都美術館・1999年４月
愛知県立美術館・1999年５月
大阪市立美術館・1999年６月



20,「路上の詩・ゼブラクロッシング遠」
パネル画布張り・アクリル顔料
Ｓ100号（162×162cm）
第76回　春陽展
東京都美術館・1999年４月



21,「路上の詩・DioxineⅡ」
パネル画布張り・アクリル顔料
Ｓ100号（162×162cm）
第７回　別府現代絵画展
別府市美術館・2000年１月

ー注釈ー〈主な出品展覧会について〉

＊１【春陽会及び春陽展】

『1922年（大正11年），小杉放菴・森田恒友・山本　鼎・石井鶴三・足立源一郎・今関啓司・山崎省三等の日本美術院洋画部に拠っていたグループに，岸田劉生・萬鉄五郎等が加わり春陽会は誕生し，翌，大正12年に第１回展を開催した。

発会の趣意は，社会的な主義主張ではなく，あくまでも「各人主義」ともいうべき，各人の制作生活の充実という一見穏やかなものであるが，いわゆる会場芸術を排するためには，「革命者の意気を持ってせん」とする，内省に向かっての激しさを併せ持っていた。

同時に，草創期の会員たちが西欧直流のアカデミズムに拠らず，むしろ東洋的基盤に根を下ろして，常に自分たちの生活に直結した制作を目指す姿勢は，時に次世代へのアンチテーゼとしての役割を果たしながらも春陽会の基本的な性格を形作ってきたものである。

昭和初期以来，ヨーロッパから帰朝した加山四郎・岡鹿之助・三雲祥之助等の参加によって，会は主知的な近代的造形性を取り入れながら脱皮しつつ，とぎ澄まされた詩心の形象化という新たな性格もつけ加えてきた。

このことは，長谷川潔を軸として前田藤四郎・駒井哲朗・清宮質文等の版画部門にも，厳格なメチエを通して受け継がれ，魅力的な世界を展開していった。

また戦時下，空襲警報のさ中に研究会活動を続けて，美術の純粋性を守ろうとした研究会的伝統は現在も継承されている。

戦後美術の多様な潮流の中で，中谷　泰・南大路一・藤井令太郎等を軸にしながら，会は積極的に異質な新しい才能の発掘に努め，それらの作家たちは，会外のあまたのコンクール，国際展等にも打って出ることによって会の活力を内外に示してきた。

これらの先人たちの築いてきた土台の上に甘んじることなく，今また，春陽会は通俗性を排して高いエスプリを求めることにおいて大衆化に組することはないが，若々しい力に溢れた，真にオリジナルな才能に向かって扉を開いている。』

(2004年・第81回春陽展 公募チラシより)

＊２【大分県美術展】

1946年創立された大分県美術協会の日本画・洋画・彫刻工芸の三部に，書道・写真の各部を統合して，1966年第１回大分県美術展として発足した。

大分県美術界の中核となる美術展であり，毎年中央画壇で活躍している作家や美術評論家を招聘して審査にあたっている。

＊３【別府現代絵画展】

1994年，次代を担う新進作家の発掘や奨励と，地域文化の向上に資することを目的に，別府市のふるさと創生事業の一環として企画された絵画の全国公募展である。審査委員には，富山秀夫・池田満寿夫・大沼映夫・酒井忠康の各氏を迎えて始められた。第５回展以降は池田満寿夫の死去により，審査委員は３名体制となった。第８回展まで毎年実施されたが，現在は，「別府アジア絵画展」として，ビエンナーレ形式（隔年開催）で引き継がれている。

＊４【青木繁記念大賞公募展】

1990年，青木繁の作品が明治という時代に与えた驚きや感動と同じように，現在の洋画界を震撼させるような鮮烈な作品を求めて創設された全国公募展である。応募点数が700点を超える中から展示されるのは70点以下という厳選された質の高い展覧会である。

＊５【西日本美術展】

1968年，九州・山口在住者の画壇への登竜門として，西日本新聞社等が主催して始まった展覧会である。毎回約80点の入選作が久留米市の石橋財団石橋美術館に展示されてきた。

＊６【小磯良平大賞展】

1992年，清新な女性像で知られる文化勲章

受章の洋画家，故小磯良平画伯（1903～88）の業績を顕彰して創設された。小磯良平大賞展は，具象，抽象の区別がなく，テーマも自由なビエンナーレ形式（隔年開催）の公募展であり，美術会に新風を吹き込むとともに，次代を担う有望な作家の発掘を目指している。また，大賞賞金1,000万円という面でも我が国美術界から大きな注目を集め，着実に定着しつつある。応募作品は，いずれも卓越したテクニックと自由な発想で描かれ，感性豊かな作品がそろっている。

第３回展は，全国44都道府県をはじめ中国，ドイツ，フランスから574人の作家の力作884点が寄せられた。この中から厳正な審査を経て選ばれ展示されたのは，大賞１点，佳作５点（野村正則他４名），入選45点の合計51点のみである。

第４回展はさらに多い1,117点の応募があり，展示作品は53点という厳選であった。このため，第３・４回展に連続入選したのは12名（野村正則他11名）のみである。主催：小磯良平大賞展運営委員会・神戸市・読売新聞社。

＊７【英　展】

1992年，田川市美術館の主要企画展の一つとして，「田川美術館大賞選定」をサブテーマに掲げて創設された展覧会である。英展の“英”は筑豊の霊峰・英彦山とARTのAにちなんだもので，画壇の新鋭の発掘・育成，俊英作家の顕彰を目的とし，地元美術界の高揚を目指す展覧会である。

「英展」は，年度ごとのテーマを設定し，沖縄を除く九州・山口各県の専門家11名の推薦委員がテーマにそった作家を推薦し，推薦された招待作家が，各１点を出品，大賞を選定する招待形式の展覧会である。

第７回展のテーマは，第１回展，第４回展に続き「自然・風景」であり，招待作家は57名であった。第７回展から絵画の枠組みを取り払うことにより，現代画壇の動向が一層反映された展覧会として美術界の一助となることを祈念して，出品作品を洋画に限定せず，版画や日本画，そして従来の枠にとらわれない新しい表現形態を模索する絵画作品なども出品できることとなった。

第７回展は，大賞１点（野村正則），優秀賞２点，佳作賞５点が賞選定委員の前田舜敏氏により選定され，上位３点が美術館収蔵作品となった。